

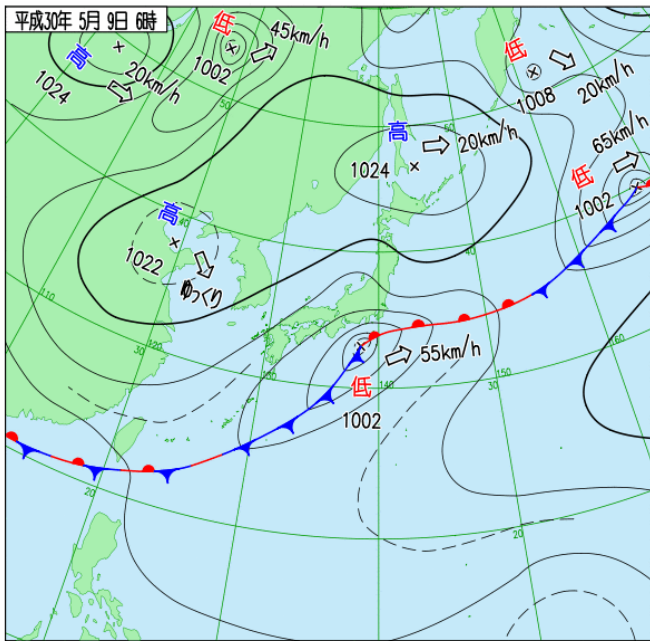
「五月の雪(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

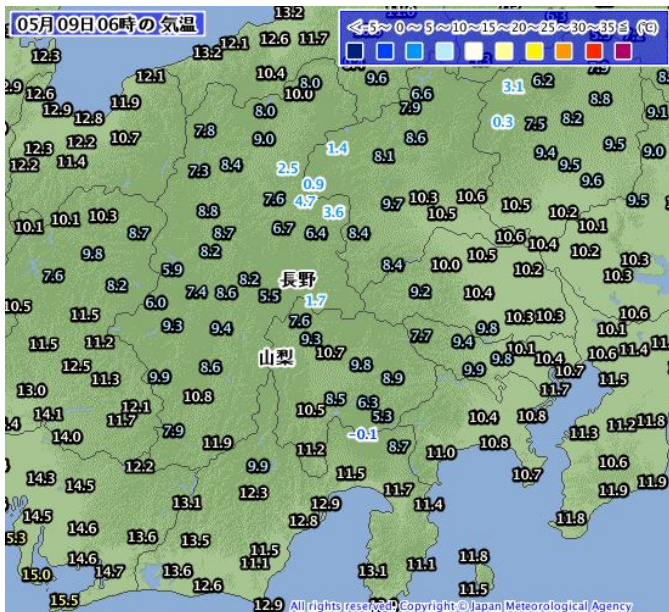
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

私が尊敬する人物の一人である周恩来は、多くの人民の願いを聞き入れることの難しさを例えて「五月の天気は厄介だ」というメモを机上に残したと、当時の秘書の紀東氏は語っている。まさにその通りで、5月の天気は時に非常に気まぐれである。真夏日になったと思えば、翌日に高原で雪が降ることもある。



5月9日の低気圧は、長大な前線を従え、上空に寒気も伴っていた。この低気圧と寒気が高原に雪をもたらしたのだ。



左下図は、5月9日午前6時のアメダス気温分布である。東京でも10°Cちょっと、八王子や立川では10°Cを切っている。更に奥日光や群馬県西部では0°C台まで下がっている。関東甲信は、5月としては広範囲に渡って気温が低い。この気温で低気圧が接近すれば、標高の高い場所では雪になって当然だろう。



この低気圧が去った翌朝(5月10日)、浅間山の山肌は真っ白になっていた。一旦雪が融けて、夏山のような姿になっていたのだが、再び雪化粧をしたのだ。計算上、山頂付近は氷点下10°C近くまで下がったにちがいない。噴気を見ると、北西風が強いこともわかる。



これが11月なら、山腹に積もった雪が根雪になってそのまま冬山になっていただろう。しかしさすがに季節は5月。雪は山麓から山頂に向かって徐々に融け、その日の夕方には、山頂付近のわずかな雪を残して、全部融けてしまった。残ったのは、谷筋にもともとあった雪田(せつでん)だけである。右下の雪田は、地元では「逆さ馬」と呼ばれ、農作物の作付けの合図の一つとして親しまれている。私にはどうしても「馬」には見えず、「オバケ」に見えてしまう。友人は「白いスノーボーダー」だと言っていた。5月にだけ見られる、不思議な浅間山の風景である。